

勇魚 ISANA

Feb. 1990 No. 2

目次

- わが国捕鯨の進路 . . . 1
京谷昭夫
水産庁 長官
- 本格調査に向けて . . . 2
石川賢広
水産庁海洋漁業部遠洋課 課長
- 鯨とくらし . . . 3
背古芳男
和歌山県太地町長
- 牡鹿町の今昔 . . . 4
安住重彦
宮城県牡鹿町長
- クジラ資源の管理 . . . 5
田中昌一
東京水産大学教授
- 肉食・魚食の構図と反捕鯨 . . . 7
長崎福三
(財)日本鯨類研究所 専務理事
- 捕鯨船とイヌイト . . . 9
C・W・ニコル
作家
- “私の主張” . . . 12
渡辺文雄
俳優

ごあいさつ

わが国捕鯨の進路

京谷昭夫

水産庁 長官

昨年は地球規模での環境問題が大きく取り上げられ、オゾン層の破壊、温室効果による温暖化、熱帯林の減少、野生生物の保護等様々な問題がクローズアップされました。

申すまでもなく、かけがえのない地球の環境を守っていくことは極めて重要なことであり、環境問題に対する関心の高まりは当然のことであると言えますよう。

私達が関係しております漁業という分野は、最も自然環境に接近した人間の活動の1つであり、それ故、水産資源の乱獲といった環境に悪影響を与える立場にも、また、海洋汚染による漁場の縮小といった環境破壊による被害者になりうる立場にもあると言えます。

水産資源を守りこれからの世代に伝えていくためには、保護の必要なものについては適切に保護し、利用にあたって合理的な資源管理をすることにより、環境の保全に細心の注意を払っていかねばなりません。

そのためには水産資源の科学的調査研究が必要不可欠です。適切な資源管理は科学的情報に基づかなければ達成することはできません。

捕鯨の問題はともすれば、感情的な立場から議論されがちですが、そのような議論が鯨資源の適切な管理に貢献しないことは明らかです。お互いの置かれている立場、文化、歴史等を理解した上での、科学的事実に基づく冷静な話し合いこそが、今必要です。そのために“勇魚”がはたす役割におおきな期待をよせるものであります。

捕鯨問題の解決には長い時間を必要とするとは思いますが、私達は科学という燈りを道標に一步一步着実に前進していきたいと考えております。

本格調査に向けて

石川賢広

水産庁海洋漁業部遠洋課 課長

南氷洋ミンク鯨の資源状態について本格的な調査を行うべく、昨年 11 月 10 日に調査母船第 3 日新丸が横浜港を出港しました。ここでは、本格調査とは何なのか、どのような経緯で行われるようになったのかについて述べてみたいと思います。

反捕鯨運動の高まっていた 1982 年、国際捕鯨委員会(IWC)は科学小委員会の意見を聴取することなく商業捕鯨全面禁止(モラトリアム)決定を採択しました。「鯨の管理に必要なデータが不足している。何故なら商業捕鯨は利潤追求のため大型の鯨を狙って捕る傾向があり、得られたデータは資源状態を正確に反映しないからである。一度全ての商業捕鯨を中止して偏りのないデータを集める必要がある。」というのがその理由でした。

それでは、IWC のいう「科学的データの不足」を解決するためにはどうすれば良いのでしょうか。

当時科学小委員会では「何頭の捕獲であれば資源に悪影響を与えることなく捕鯨が継続できるか」が問題になっていました。この解明のためには 南氷洋のミンク鯨は今、どれだけ生息しているか。 今後どのくらいの割合で増えて行くか。の 2 つの観点から調査が必要です。 については既に 1978 年から目視調査が実施されており、現在では 73 万頭以上生息していることが IWC によって確認されています。ところが については目視調査では解明できません。最小限の捕獲を行い、雌雄別の年令組成(鯨の人口ピラミッド)から死亡率を推定し、また、妊娠した雌の割合より毎年生まれてくる鯨の数を推定する必要があります。

このような理由から我が国は捕獲調査の実施を決定しました。捕獲調査計画は 1987 年の科学小委員会に提出されましたが、ここでは「限られた捕獲頭数で資源状態を正確に反映したサンプルが得られるか」との疑問が出されました。このため、一昨年、昨年と調査の実行可能性を調べる予備調査を行って来ましたが結果はいずれの場合も、当初計画が実行可能であることを示していました。この結果は科学小委員会でも高く評価されています。以上のような経緯を経て今回ようやく当初計画していた の解明のための捕獲調査(本格調査)の実行が可能となったわけです。

鯨とくらし

背古芳男

和歌山県太地町長

和歌山県太地町の代名詞は「鯨の町」である。日本人と鯨のかかわりは縄文時代からと言われ、全国の各浦々で「寄り鯨」を捕っていたものを当町の和田忠兵衛頼元が慶長 11 年(1606 年)に「鯨組」を組織し、沖合に出て捕鯨を行ったのが捕鯨業の始まりであり、その後、孫の頼治が「網掛け突捕り法」を考案し、住民全体が参加する大規模な組織にしたことにより捕獲実績が向上した。この方法は全国各地に伝えられたことにより捕鯨業は我国最大の水産業に発展した。しかし、明治 11 年の「セミ流れ」大遭難事件により人材、資材を失い町のくらしは疲弊のどん底を経験したのである。鯨とともに生き捕鯨しか知らない太地の人達はその後の近代捕鯨にも積極的に参加し、沿岸捕鯨、南氷洋、北洋にと多くの人々が参加し、名砲手をはじめ優秀な捕鯨人材を輩出した。

住民の日々のくらしの中には多種多様の鯨文化と、知らず知らずに捕鯨暦が定着し、習慣が生まれ現在まで受継いできた。

1982 年に IWC によって決議された商業捕鯨全面禁止の衝撃は大きく、当町にとっては「明治のセミ流れ」の再来であり、捕鯨を中心に何百年もくらししてきた私達の生活を否定された思いがする。町として住民が天職と信じて従事した捕鯨を何としても存続させなければならないと考える。捕鯨存続といっても過去の華やかな時代のものではなく、科学的研究に基づく資源管理を十分に行い、その上で活用できる範囲で捕鯨を存続させたいと願っている。

一昨年国の施策として話題となった「ふるさと創生事業」についても、当町は捕鯨の歴史、文化、伝統と人材を生かしかつ、21 世紀を展望した『国際鯨類研究所構想』を実現させ、鯨のことなら何でもわかる町として鯨情報の発信地を目指す町づくりに取り組んでいる。

当地方が置かれた自然的、地理的条件の中で「そこにはそのくらしがある」をモットーに、あくまでも鯨にこだわって行きたいと思う。

牡鹿町の今昔

安住重彦

宮城県牡鹿町長

当町と鯨とのかかわりは、明治 39 年 3 月に東洋漁業株式会社が事業所を鮎川に開設したのに始まる。同年 5 月 17 日に捕鯨事業船(今日の捕鯨母船と同じで船内で鯨の解剖処理が出来る船)ミハイル号(3643 トン)が鮎川に回航され、また 6 月 9 日に捕鯨船ニコライ丸(130 トン)も到着し、6 月 11 日、金華山沖四十湊の洋上でニコライ丸の捕鯨砲を放った最初の轟音が第一歩である。獲物は約 22m のシロナガスで同年漁期中に 33 頭を捕獲したのである。これらの二隻の船はいずれも日露戦争で海軍がロシアより拿捕した船で、東洋漁業が政府より借り受けた船である。金華山沖の鯨資源は早くから伊達藩時代に藩学養賢堂の学頭大槻清準が文政年間に「鯨志稿」を著して捕鯨の効用を説いており、江の島沖で四頭の鯨を捕獲したとの記録もあり、金華山沖五十湊の洋上は俗に「抹香城」といわれ、マッコウ鯨の群集する漁場とも言われた所である。しかし、昔の貧弱な装備では自船の安全を保つのがやっとで、捕獲どころではなかったようである。東洋漁業が進出したころは、鮎川の漁民は小漁や採貝藻によって生計を支えているものが多く、鯨の解剖による地先海面の汚染を恐れて反対した。当時の村長が鮎川浜の発展を考え、捕鯨事業の何たるかを知らぬ漁民を熱心に説いて廻ったり、又東洋漁業も年額三百円を村の基本財産に寄付することを申出、ようやく事業所の開設にこぎつけたようである。今私が沿岸小型捕鯨再開にむけて走り廻る姿と対比して見ると今昔の感にたえない。勿論その頃の役場の記録を見ると明治 38 年度の村の予算は二千六百三十二円で 39 年度三千二百四円で 40 年度八千七百七十一円と飛躍的に増加した事を考えると、いかに鯨が村の経済をうるおしたかが想像される。勿論従業員をふくめた他県からの流入があり人口が急増した事は当然である。大正、昭和を通じて、南極捕鯨の乗員として多くの町民が参加し、まさに捕鯨一色にこの町が発展したのである。しかし、昭和 27 年日本水産が女川へ、大洋漁業、極洋捕鯨が塩釜へと交通不便から工場を移転し、さらに昭和 63 年、商業捕鯨禁止と、いわゆる鯨城下町がかつて一万三千人いた町民が現在七千五百人と、さらに過疎が進む中で観光の町へ脱皮をはかりながら小型沿岸捕鯨再開こそ、この町の再生のカギになりそうである。ご声援の程を。

クジラ資源の管理

田中昌一

東京水産大学教授

クジラの保護をめぐる議論がかまびすしい。過去の捕鯨の経過をみると、資源の管理がうまくいっていたとは、おせじにもいえない。そのつけが、何十年もたった今、回って来たということか。人間のあくない欲望追求が、現在の輝かしい社会の発展をもたらした一方で、いろいろな矛盾を生み出した。同じ水産資源を利用していても、漁業は発展を続け、捕鯨はほとんど消滅状態だ。クジラと魚の違いを無視すると、こんなことになる。

クジラ資源の本格的管理が行われたのは、戦後 IWC が設立され、南氷洋捕鯨が規制されるようになってからである。規制は第一に捕獲枠によって行われたが、その枠は実頭数でなく、シロナガス換算という方式がとられていた。つまり、ナガス 2 頭、イワシ 6 頭等をもってシロナガス 1 頭と換算し、捕獲枠はシロナガスの頭数として定められていた。各鯨種を何頭捕獲するかは、全く各捕鯨船にまかされていた。しかも、捕獲枠そのものが科学的に十分合理的なものではなかった。

当時、シロナガスがかなり減少していることは明らかであった。また鯨油が生産過剰気味で、なんらかの生産調整が望まれていた。このような状況のもとで、シロナガス換算方式を用い、戦前の水準をやや下まわる枠が定められたということ自体は、一概に否定できない。問題は、この捕獲枠がそのまま、1960 年頃まで続けられたことである。現在では、自由選択の条件のもとでは、漁業者が最も有利な魚種から個別的に乱獲していくことが理論的に証明されている。南氷洋でも、体の大きい方からシロナガス、ナガス、イワシと乱獲していった、最後にミンククジラが開発されることになった。今から思うと、1950 年代にシロナガス換算方式を改めるべきであった。

1960 年代にはいると、ナガスクジラの減少が明らかとなり、シロナガス換算方式のままに枠が急速に減らされていった。1972 年のストックホルム人間環境会議で、捕鯨モラトリアムが決議された。IWC は捕鯨の全面禁止は科学的根拠がないとしてしりぞける一方で、懸案になっていた鯨種別割当などの規制をつぎつぎと実行に移していった。そして、科学的資源管理のための「新管理方式」を 1975 年に導入した。

新管理方式は生物の動態理論にもとづいており、その意味で科学的である。生物集団には与えられた環境の中で増殖できる限界がある。捕獲がなければ生物集団はその限界の所で安定し、増加数も増加率も 0 である。捕獲によって集団が小さくなると、過密の影響が緩和されて、増加率が増す。といっても、集団が小さくなりすぎると、いくら増加率が高くても増加は小さい。ある中間の水準で増加量が最大になる。この増加量だけを捕獲すれば、集団の大きさを維持したまま、最大の捕獲を継続してあげることができる。この量を MSY という。新管理方式では、 MSY を与える資源の水準を規準に、初期管理資源、維持管理資源、および保護資源を定義している。この方式によって、資源の減少の著しかったナガス、イワシなどの多くの資源が新たに保護資源に分類された。

新管理方式はこのように、すでにかなり減少していた資源からの捕獲を禁止する上では効果を発揮したが、それほど減少していない資源の利用については、 MSY や現在資源量の推定値が十分な精度をもっていないため、資源分類について議論が分かれ、科学委員会が結論を出せないことがしばしば起った。このことが商業捕鯨のモロトリアムを招いたともいえる。モロトリアムの実行に当っては、資源の包括的評価を行ってこれを見直すこととされ、それに関連した論議が科学委員会の中で始まった。包括的評価でどのように判定するかは、どんな管理方法を採用するかによって変り得る。新管理方式をそのまま適用するのであれば MSY 等の推定が不可欠だが、これを必要としない管理方式も考えられる。

現在科学委員会の中で管理方式改訂の研究が進められており、5 つの方式が提案されている。田中の提案した方式は、とかく問題のある資源動態モデルや自然死亡率などを用いず、フィードバック方式を意識的に導入して、目視や努力当り捕獲量の資料だけから資源を管理しようというものである。その原理は、資源の目標水準を定め、資源がこれより高いか低い、および資源が増加しつつあるか減少しつつあるかによって、捕獲率を上げ下げするものである。現在までに多くの電算機シミュレーションが行われたが、クジラ資源に対して有効で、最少の科学的データで管理の実行できることがわかった。

肉食・魚食の構図と反捕鯨

長崎福三

(財)日本鯨類研究所 専務理事

鯨肉を食べるとは怪しからんという意見がある。反捕鯨の人びとの行動原理は、ここに基点を置いている。さまざまな理由づけはあるにしても、煎じつめれば、「鯨を殺すこと」、「鯨肉を食べること」への反対につきる。食糧の乏しい時代ならともかく、経済的繁栄の中にある日本で、鯨肉を食べなければならない理由はあるまいという主張である。しかし、たかが鯨肉といいながらも、一国の「食」の内容について他国の人びとが干渉するというのは例のない話である。宗教的教義によって、特定の食物を忌避するという例は少なくない。しかし、このような教義を信奉する人びとも、異宗教の人びとに、自分達の戒律を押しつけることはない。アメリカでアメリカ人の鯨肉食を法律で禁止したとしても、日本人が文句を言う筋合ではない。これと同様に日本人が鯨を食べようと、うにやなまこを食べようと、アメリカ人の知ったことではない。

日本人は本来、農耕型米食民であり、東南アジアの多くの国ぐにの人びとと同様、米を主食としている。これに対し、欧米人は牧畜型肉食民といえることができる。特にアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでは肉の供給は潤沢であり、消費量も多い。ここでは主食は肉である。日本の場合、動物性食料は主として海や湖の魚貝、つまり水産物に依存してきた。そういう意味で海洋依存型である。これを簡略化して言えば日本人の食は米・魚を主軸とし、アメリカ人のそれは肉そのものということになる。

さて、ここで肉食と魚食とを対比してみよう。世界の国ぐにの畜肉・魚貝の年間平均一人当りの摂取量を図にかいてみる。まず、畜肉、魚の摂取量がそれぞれ 50 キログラムの点を直線で結ぶと、内側にできた三角形の中に入る国ぐに(つまり肉と魚を合計しても 50 キロに達しない)と、その外側にある国ぐにとに区別できる。外側の国ぐにには経済先進国がすべて含まれる。これら経済先進国の中でも畜肉の消費量には大きな開きがある。さきに述べた 4ヶ国に南米のアルゼンチンを加えた 5ヶ国は肉の摂取量が 100 キロをこして、突出している。まさに肉、特に牛肉を主食としている肉食国であり、当然のこと乍ら魚の摂取は少ない。フランス、イギリス、オランダ、西ドイツ、イタリアなどを含むヨーロッパ勢は 100~60 キロの肉

をとっており、肉食国である。デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北欧諸国にソビエト、スペインを加えた国々には肉以外に魚への依存がかなり高くなる。これに対し、日本とアイスランドは肉より魚への依存度がはるかに高く、典型的な魚食国の代表である。

この構図を頭に入れながら、捕鯨との関係を考えてみよう。現在、商業捕鯨はIWCによって禁止されているので、捕鯨国といういい方は妥当ではないが、ごく最近まで捕鯨を行ってきた国々には日本、アイスランド、韓国、ソビエト、スペイン、ノルウェー、デンマークなどである。いずれも漁業国であり、海洋への依存が比較的高い。この中で鯨肉を食用にしてきたのは日本、ノルウェー、アイスランド、グリーンランドで、他の国々には捕鯨国であっても鯨肉は食べない。鯨製品は殆ど日本へ輸出していた。捕鯨国は必ずしも鯨肉食国ではない。だから、事情によっては捕鯨をやめることも、さして難しくないし、そうすることもできる。

しかし、日本のように伝統的に鯨肉を食べてきた国では、単なる経済問題の枠をこえた、食文化にからむ問題が含まれる。かねて解決するような問題ではない。現在も捕鯨存続のため、IWCの場でその合理性を主張しつづけている日本、ノルウェー、アイスランドは鯨肉食国である。アメリカの反捕鯨圧力の中で、その姿勢を維持しているのは、単なる経済問題ではないからである。このことはアラスカのエスキモー、グリーンランドのイヌイトなどの住民、ソビエトの北極圏の人びとにも言えることである。幸い、この地方の人びとは、いわゆる「原住民生存捕鯨」という形で、その捕鯨活動、鯨肉食がIWCによって認められている。

一方畜肉の摂取量の多い国々には、いずれも反捕鯨運動の盛んな拠点であることに気がつく。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、などがそうであり、いずれも、アングロ・サクソン系の人びとが中心の国々にある。(これらの国々には、かつては主要な捕鯨国であった。)ヨーロッパではイギリス、フランス、オランダ、西ドイツなど、いずれも反捕鯨運動が活発であり、食性は肉食である。したがって、ここで捕鯨 - 反捕鯨という構図を、肉食 - 魚食という形に置き換えることもできる。もし、そうだとすれば、捕鯨国の論理を理解し易い立場にある国々には、米食 - 魚食を軸にした食性をもつ東南アジアの人びとではあるまいかと思う。

捕鯨船とイヌイト

C・W・ニコル

作家

1965年から66年にかけて、私はバフィン島南端のカンバーランドサウンドで過ごした。現地のイヌイトたちのアザラシ捕獲とその利用状況全般についての情報収集を行うべく、カナダ政府の漁業調査局から派遣されたのである。

任務の性格上、私はキャンプからキャンプへとイヌイトについて回ったのだが、この気のいい人々は当時、経済的苦境に追い込まれていた。それというのも、アザラシの毛皮の取引について、いわゆる「保護主義者」たちから非難の集中砲火を浴びせられていたためだ。

イヌイトたちは決して、赤ん坊のアザラシやタテゴトアザラシを殴り殺したりはしない。アザラシ捕獲に反対する人々は、T を通じてそのような印象を与える番組をさんざん流してきたが、あんなものはすべてデッチアゲにすぎない。イヌイトはライフルと銚を使って一人前のアザラシだけを仕留める。それも、弾薬やガソリン、食糧など、生活に欠くことのできないものを手に入れるためだ。彼らはアザラシの生皮を売って生計を立ててきたが、その頃毛皮の市場価格はどん底に落ち込んでいた。

またもや、南の人間のふとどきな行動が北の人間を苦しめる結果となった。連中は、イヌイトのことなどまるで顧みようもしないものである。

最近、バフィン島の指導者が書いたという手紙を読んだ。そこには、ライフルや罟、網の出現が、いかに大家族制を崩壊させていったか、そして、皆が力を合わせて行っていた古き良き時代の漁のスタイルを変えてしまったかが力強く、見事な英語で綴られていた。

彼は続けて、イギリスやアメリカの大型捕鯨船がやって来た時のことに言及している。カンバーランドサウンドは、ホッキョクセミクジラの数少ない大規模な漁場の一つだった。クジラのことや氷の状態を熟知しているイヌイトはすぐに彼らに雇われ、やがて共に海に生きる人間同士、対等なパートナーとしてセミクジラ漁に携わった。

白人たちのお目当てはクジラの皮脂と牙齒だ。イヌイトにとって重要なのは肉や骨、内臓であり、あとはランプをとるためのわずかばかりの皮脂があればよかったから、それから百年あまりことは順調に運んだ。

話を1965年に戻すと、私は行く先々で、今世紀初頭に終わりを告げた蜜月

時代のなごりを目にしたものである。誰にも顧みられぬまま苔むしたクジラ捕りたちの墓、錆びた大鍋、朽ち果てた小屋。ついでながら、現地には青い眼のイヌイットがことのほか多いことも付け加えておこう。

とはいえ、カンバーランドサウンドのイヌイットにとって最大の影響は、パフィン島の指導者も言うように、彼らが再び皆で集まって漁をし、収穫を分かち合うようになったこと、そして豊かなクジラの肉を心ゆくまで味わうことを覚えた、ということだ。

その後、南極において「捕鯨オリンピック」のごとき凄まじい乱獲が行われたのは皆さんもよくご存じのとおりである。そうした恥ずべき振る舞いの報いとして、19世紀も終わろうという頃にはクジラの数は一激減し、採算のとれなくなった各国の捕鯨船団はさっさと引き上げてしまったのである。

ここ十年の間に、カンバーランドサウンドではセミクジラが目撃されることが多くなってきている。しかし、今ここでその情報を云々するつもりはない。ミルトン・フリーマン博士のような研究者たちの調査を見れば、北極のセミクジラが甦りつつあることを確信することができる。さらに博士は、自分たちが従来行ってきた程度の小規模な捕鯨では、セミクジラの減少を招くような悪影響を及ぼすことはないというイヌイットの主張は正しかった、と結論している。

カンバーランドサウンドで、イヌイットは二隻の捕鯨船を造った。百年前、白人たちと力を合わせた頃のような船だ。その頃実際に漁に加わった経験を持つ者は、今ではエトゥアンガトただ一人となってしまった。今年、若い者たちは、この、84歳になる老漁師から当時の捕鯨について教わることになっている。

現在、イヌイットたちは、カナダ政府に対して強く訴えている。来年、セミクジラを一頭だけ、捕獲することを許可してほしいと。自分たちの食糧と、そして文化のために。もしも政府がこれを拒むようなら、彼らはきっと怒るだろう。もう一万年以上も前から北方に住み、クジラを主食としてきた人間に対して、何も知らない南方の白人たちがそんなことを言う権利などどこにあるのか、と。たった一頭のクジラが彼らにもたらずもの大きさを知らない役人たちに。イヌイットたちはそのクジラで宴を催し、民族としての誇りを取り戻すことができるのだ。それが観光客を呼び寄せるとなることは疑問の余地もない。

とはいえ、保護主義者どもがまたぞろ騒ぎ出すのも目に見えている。一番の厄介者はアメリカ人だ。アラスカの現状など、まるで目に入らないらしい。カナダ政府が「どうぞお捕りなさい、あなた方の当然の権利ですから」などと言おうものなら、国際捕鯨会議の場へと引き戻されるのは明らかだ。政府も、あの茶番劇に加わるのだけはごめんだと思っているに違いない。

私はといえば、当然のことながらイヌイットたちを応援したい。今年、私は再びカンバーランドサウンドを訪れることを計画している。三ヶ月か、できればもっと滞在したい。もちろん私費でだ。その間の出来事は、日本の読者にもつづさにお知らせしたいと思っている。

おい、太地の諸君！ イヌイット tara の方が腹が座っているようだぞ！ 諦めるのはまだ早い。そうは思わないかね？

“ 私の主張 ”

渡辺文雄

俳優

食文化はその民族の最も基本的な文化である。その民族の個を作り上げているのは間違いなくその民族固有の食文化なのだから。

だからこちらからみたら考えられないようなものを食べている人々がいたとしても、その事を嫌悪したり否定する事は絶対に出来ない。ちょっと大袈裟になるかもしれないが、その食文化を嫌悪したり否定したりする事は、つまりその民族の存在そのものを嫌悪し否定する事になるのではなからうか。

だから鯨を我々が食べるという事に関しての無理解な否定的意見は容認する訳にはいかない。

ただ殺すという事と食べるという行為は全く違う事である。彼等の意見を聞いてみると、どうもこの辺りが混乱しているように思える。食べるという行為は他の命を己が中に移し変えるという事である。だから、食べるという行為の一番の本質は間違いなく宗教的な行為なのである。彼等の好きなスポーツ・フィッシング等というものは、命の見えない、思い上がった人間の虐殺行為である。

鯨の命が見えている我々は、鯨のどんな部分でも捨てる等という事は決してした事がない。

鯨の命が見えているから、鯨塚を建て手を合せる。鯨の過去帳を作りその菩提をとむらう。宗教という事は命をしっかりと見つめる事である。地球規模での環境保全問題が盛んになってきた。まことに嬉しい事であると思う。

ただこの環境保全問題を声高に叫ぶ人々の中に、まことに胡散臭い一群れがあるように思えてならない。

その論拠の基本にあるセンチメンタリズム、そして数をたのんでの非論理性、相手の言う事を聞く耳もたぬ自分達だけが正しいと思い込んでいる傲慢な姿勢。

こんな彼等が目指している世界には、平和や調和という言葉が存在するとは、どこから見ても信じられない。

自然の事を最も理解しているのはハンターであると思う。これは私の確信である。

自然が無謀に破壊されて一番困るのはハンターである。狩猟本能のおもむくままに獵が出来る時代はもうとっくに終わったのだという事を知っているのは、

本物のハンター達である。

趣味や遊びではなく、自分の全存在をそこにかけている本物のハンター達である。こんな存在の人達を簡単に非論理的に抹殺してしまうセンチメンタル・ナチュラルリスト達だけでは絶対に地球を救うことは出来ない。

地球の為に我々と鯨の関係は理解してもらわなくてはならない。